札学保

札幌市学校保健会

No. 158

2023. 3. 17

事務局　〒004-0864 札幌市清田区北野４条５丁目4-80
札幌市立北野台小学校
TEL (011) 882-5281　FAX (011) 882-2792
学校保健会HP http://www7b.biglobe.ne.jp/~satsugakuho/

「ことば」の使い方

市立札幌豊明高等支援学校　校長　**小　山　　学**

随分と昔のことである。小学生だった私は、よく言えば明るく大らかで、誰とでも仲良くできる明るい性格の少年であった。ただし、大人から見ると少々生意気で屁理屈こき（これは方言だろうか）だと思われていたかもしれない。

当時の小学生は、筆入れの中に小さい鉛筆削りを入れていて、鉛筆の先が丸くなるとゴリゴリして、ツンツンにするのが楽しみであった。教室に置いてある手回しの鉛筆削りの方もなかなかの削り心地で、違ったゴリゴリ感を味わうことができた。その後、間もなくして電動の優れものが登場し、時代はどんどん進化しているなと子供ながらに感動したものである。

しかし、その頃にある大人言われた「ことば」が、間もなく60歳を迎えようとしている私の心の中にずっと嫌な思い出として残り続けているのである。

「最近の子供はダメだ。鉛筆一本、自分で削ることができない。」

もともとあまり好きなタイプの人ではなかったことと生意気だった私は

「おじさん、それはどういう意味？　鉛筆を鉛筆削りで削って何が悪いの？」

するとおじさんは、しめしめ罠にかかったなと言わんばかりのいやらしい顔で（当時はそう感じたし、今でも記憶の中に鮮明に残っている）

「鉛筆はナイフで削るのが当たり前。鉛筆削りなんか使っていたら、ナイフが使えない大人になってしまうぞ。」と勝ち誇ったように一方的に言いながら、私の目の前で得意げにナイフを使い、あっという間に鉛筆の先をツンツンにしてしまったのである。それを見て私も、負けずにナイフで鉛筆を削ってみたが当然うまくいかず、悔しさのあまり泣きながら、何度も何度もナイフで鉛筆を削り続けたのである。

もしかしたら、あの時おじさんは「いろいろと役に立つから、ナイフが使えるようになった方が良いよ。」と伝えたかったのかもしれない。しかし、その時の私にはまったくそう思えなかったし、おじさんの「ことば」は、小学生から50年近くもの間、嫌な思い出として私の中に残り続けてきただけである。

「ことば」は、時に人の心に安らぎを与え、時に人と人とをつなぐコミュニケーション手段として重要な役割を担う。しかし、使い方を間違えると、伝える側に悪意がなくても受け取る側が傷ついたり、もしかしたら深い傷となって、一生苦しみ続けたりすることさえあるかもしれない。

だから、私は今でも誰かと話をするときには、自分が経験した嫌な思いを相手にさせてはいけないと細心の注意を払うようにしている。家族や友人などの親しい相手、職場の仲間はもちろん、特に生徒に対しては、自分が知りうる限りの様々な相手の情報を頭に置き、相手が不快な思いをしないように「ことば」の使い方を選ぶように心がけている。

昨今、様々な困り感を抱えている子供たちが増えてきている。もしかしたら、自分の「ことば」の使い方一つで子供たちを一生傷つけてしまうかもしれないと大人は常に考えるべきではないだろうか。

第 38 回　札幌市学校保健会　研究大会
令和４年 12 月 10 日（土）　ホテルライフォート札幌

第 38 回札幌市学校保健会研究大会が、去る 12 月 10 日（土）にホテルライフォート札幌にて開催された。昨年と同じく、会場と ZOOM による配信の２本立てとし、会場では３密を避ける等感染対策を万全にして開催した。参加者は会場･ZOOM 含め、約 80 名の参加があった。大会は、札幌市学校保健会多米会長の挨拶により幕を開けた。

今年度の研究は５か年計画のうちの３年目である。まず、研修部長丸山　悠から研究の概要説明があり、４部会より研究発表後、藤女子大学大学院人間生活学研究科長の教授である庄井　良信氏から講評をいただいた。

【健康教育部会】
学校給食栄養士会　千葉　直美　氏

札幌市学校給食栄養士会で毎年札幌市の小学５年生と中学２年生を対象に調査をしている「児童・生徒の健康と食生活に関する調査」の結果についてお話をいただいた。

朝食摂取の有無が疲労感・イライラ感の増減につながっていることや、起床時刻・就寝時刻と朝食の摂取の有無が影響している。望ましい生活リズムの定着・向上させるために､児童生徒への情報提供や保護者への情報提供を行い、家庭との連携が大切である。朝ご飯を食べない・朝ご飯を用意できない理由はさまざまであることから、小さな一歩から始められるように一人ひとりの Well-being へとつなげていくことが大切であると強く話された。

【保管管理部会】
医師会　眼科学校医　天野　珠美　氏

現代社会は、インターネットが普及した情報化社会であり、子どもたちを取り巻く環境は急激に変化している。さらに ICT 教育の導入が始まり、子どもたち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む ICT 環境の実現を目指している。しかし一方では、子どもたちの視力の低下が課題となっていることについてお話をいただいた。

日本人の近視は年々増加傾向にある。世界的には近視問題は重要視されており、各国で児童生徒への近視対策に力を入れている、とのことであった。日本では、学校の ICT 化により視力低下が進まないよう細心の医学的知見に基づいた対応が極めて重要であり、児童生徒の近視を抑制するために、イラストを活用した分かりやすい資料での啓発も行われている。小児期の近視の進行が、将来目の病気にかかりやすくなる恐れがあるため、児童生徒が自らの生活習慣を見直すことが大切であると話された。

【心の健康部会】
小学校長会　久保　幸範　氏

コロナ禍により子どもたちは、自分の思いや考えを表に出せないことや自分の気持ちや感情をコントロールすることが難しくなっている。さらに自己肯定感の低さが課題に挙げられている。このことから、目指したい子どもたちの心は、「たくましさ・不安や心配に負けない・自分らしさを表出できる・自己コントロールができる・感謝できる」ことであるとお話しされた。

豊かな人間関係を築き、深い信頼関係を作ることが「心の健康」を維持していく上で大切であり、学校で取り組んでいかなければならない。

学校の課題の一つとして、子どもたちの悩みや困りを受け止めることができる学校の体制が重要であり、今後は地域の受け皿を充実させていくことも重要であるということで話が結ばれた。

【地域保健部会】
小学校校長会　小菅　猛雄　氏

地域保健部会における意見交流から、学校･学校医･保護者のそれぞれが､「もっと情報交流したい」や「連携していきたい」という思いを抱いている一方で、お互いに気を使いすぎて遠慮している実態が見えてきた。札幌市小中学校アンケートの実態からは、感染症やアレルギーに関することは学校保健委員会と学校医の中でよく話し合われている。さらに学校保健委員会と学校医の連携を深めるために、保健指導に関することや、児童生徒の対応に関することを学校医からアドバイスいただきたいという思いが学校にあると分かった。

さらに学校から家庭・地域に発信をしていくために、学校だよりや保健だよりに学校医コラムを掲載や、オンラインでの意見交流や情報提供を行えると学校、学校医、保護者地域との連携が深まるのではないかと話された。

生徒指導の提要の改訂（2022）と ウェルビーイングの支援
藤女子大学大学院人間生活研究科長　教授　庄井　良信　氏

初めに子どもたちがコロナ禍の複雑な社会情況の中で、深い心の傷や学習性無力感を抱えて生きている子が少なくないという話をされた。

生徒指導要領の改訂に伴い、個性の発見の良さや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を目的として、まず、一緒に成し遂げること。次に、困ったときに助け合うこと。子ども･支援者･協力者の声を聴き、対話の中で絶えず探求し合うことを行い、仮説（最適解）を求めていくことを心掛ける。人が育っていくうえでなかなか正解はないとお話しされ、「正解」ではなく「最適解」を探求していく大切さを伝えられた。

さらに、「心の浮き輪」を育む存在論的承認（愛着形成の基盤）についてお話いただいた。世界への基本的な信頼（愛着）があること、自分が自分であって大丈夫だということを伝えていくこと。そこには､「Doing」ではなく「Being」で愛された子どもの自己感覚が重要である。周りの大人が、なかなか思うように「できない」子どもの痛みに寄り添い、共存的他者としてともに歩むことを意味している。

様々なことを考慮し、子どもたちをサポートしていくためには､学校の教員と地域の専門家が子ども理解を深めあっていくこと、地域にその子どもを見守る複数の他者のネットワークを広げていくことの重要性をご教授いただいた。

第69回　北海道学校保健・安全研究大会 根室大会に参加して

札幌市立北野台小学校　堀江　　仁

令和4年11月20日(日)日本最東端の位置にある「朝日に一番近い街」根室市の道立北方四島交流センターを会場として、第69回北海道学校保健・安全研究大会根室大会が次の大会主題・副題の基、開催された。

〈大会主題・副題〉
生涯を通じて、心豊かにたくましく
北の大地に生きる　子どもの育成を目指して
～海と大地の豊かさに根ざして生きる『ねむろ』から
未来を切り拓き逞しく生きる子どもの育成を目指して～

【開会式・学校保健功労者表彰式】

開会式には、日本学校保健会中川会長を始め多くのご来賓の出席の基で行われた。主催者挨拶として、本会の前会長である北海道学校保健会の松家治道会長も登壇された。引き続きの学校保健功労者表彰では、学校医50名･学校歯科医33名･学校薬剤師10名・教職員2名の計95名の受賞が発表され、本会の多米淳会長と有岡秀樹副会長が受賞された。しかし、現在の新型コロナ感染症の状況を鑑みて、表彰式･表彰盾授与等のセレモニーは行われなかった。

【行政説明】

続いて、北海道教育庁学校教育局の今村隆之健康・体育課長より、午後から部会での問題提起として「望ましい生活習慣の定着を目指して」という行政説明（3つの項目に絞って）が行われた。

①道内の子どもたちに身に付けさせたい力②本道の子どもたちの健康状況③新型コロナウイルス感染症の影響とその対応について子どもたちに関わる数多くのデータに裏付けされた話をされた。

〈基調講演〉
「コロナ禍における
子どもたちの育ちと学びを考える」
講師　日本体育大学体育学部
教授　野井　真吾　氏

【基調講演】

子どもの体と心・連絡会議議長である野井先生の話は、興味深い内容が満載だった。豊かな経験、数多くのデータを基に主に多くのスライドにより3つの提唱がされた。

〈まず〉先生が保育・教育現場の方から聞いた子どもたちの「気になる」や「何かおかしい」という姿からスタートされた。姿勢の悪さや授業中にじっとしていられない、朝起きられないなど、健康と病気の狭間と考えられる状況であった。

〈提言1〉「光・暗闇・外遊び」のススメ

「早寝･早起き･朝ごはん」は、健康生活のバロメーターであって、取組のスローガンとしては、必ずしも適切とは言えないと思うのです。だとすれば、「光・暗闇・外遊び」等、少しだけ頑張れそうなことを呼びかけてみよう、と提唱された。

〈提言2〉「ワクワク・ドキドキ」のススメ

昼は子どもが子どもらしくワクワク・ドキドキしながら夢中になれるような取組、興奮できるような取組を仕かけてみよう、と提唱された。

〈提言3〉「よい加減」のススメ

まずは、子どもたちでなく、私たち大人も楽しみ・のんびり・輝きながら「よい加減」を探求していくことも大切だと思うのです、と話された。

紙面上では限りがあり、睡眠･大脳前頭葉･スクリーンタイムのことなど十分に伝えられないのが残念である。

いよいよ次年度は札幌大会の年となる。今後の準備等を進め、良い大会にしていきたいと思った。

札幌市小学校長会
「健やかな体」育成部の活動について

札幌市立東園小学校長　相馬　　聡

◆はじめに

札幌市小学校長会は、「札幌市の教育が目指す人間像『自立した札幌人』の実現に資するよう、校長としての役割と指導性の研鑽など職能向上に努め、本市教育の振興に寄与する」ことを運営方針とし、10の支部と６つの専門部を組織して活動している。今年の２月で３年目を迎えることとなってしまった新型コロナウィルス感染症対策を講じながらも、子どもたちの健やかな学びの保障を目指すため、「学校経営の充実」「研修活動の充実」「組織の充実と強化」の３点を重点として取り組んでいる組織である。

６つの専門部は札幌市小学校長会の研究主題「ともに未来を創造するたくましくしなやかな『さっぽろっ子』を育む豊かで確かな小学校教育の実現」を受け、それぞれが副主題を設定し研究を推進している。その中で「積極的に心身の健康の保持増進や体力向上を図るための指導の推進」を担っているのが「『健やかな体』育成部」である。本部会では「心身ともに健やかな子どもを育む学校経営の在り方」を研究副主題として設定し、校長の役割と指導性を究明すべく取り組んでいる。今回は、本部会の今年度の取組について紹介したい。

◆研究の視点と研究体制

1　健康を保持増進しようとする意識を育む指導の在り方
2　学校における体力向上に向けた体育学習や日常活動の在り方
3　感染症予防対策を含めた今日的教育課題に対応するための関係団体との連携

・本部会員 31 名を「すこやか部門」（視点 1）と「からだ部門」（視点 2）の２部門に分け、部門毎に視点に迫る学校経営事例を提言する。各部門では、さらに２グループに分かれ、提言内容を校長としての役割や指導性にフォーカスし、協議を行う。その際、自校の取組、実践を交流し研究内容を補完する。
・グループ協議後、協議内容を簡潔にまとめ全体の場で発表することで、情報共有を行う。

◆研究の実際

・視点１・２については、各部門や小グループ、時には部門間をクロスさせたグループ編成を行うことで、提言からみえてきた課題について幅広く交流し、各事例における校長としてのあるべき役割と指導性を追求することができた。
・視点３については、札幌市保健所食育･健康管理担当課長、民間企業管理栄養士による「体力と食育」「スポーツと栄養」についての講演で、心身の健康と食育の関連についての理解を深めることができた。また、札幌市学校医協議会会長による講演「脊柱側湾症～学校健診における見落としについて」では、学校健康診断の役割と重要性についてあらためて認識することができた。さらに、札幌市教育委員会指導主事による講演「健やかな体の育成を目指して」では、課題探求的な学習の実施や「健やかな体」育成プログラムの推進の重要性について学ぶことができた。

◆おわりに

今回は、札幌市小学校長会の一専門部である「健やかな体」育成部について紹介したが、本部会に限らず、全ての専門部で得られた研究成果は、時を置かずに全支部で情報発信され、全会員が成果を共有している。そして、それぞれの学校経営に活かされている。

現在の社会情勢に目を向けると、コロナ禍については３年の時を経て、何とか今春に向け落ち着きつつあるようだが、価値観の多様化、少子高齢社会の到来、地域コミュニティの核としての学校の在り方、Society5.0 における学びの在り方、教員不足、働き方改革等々、子どもや学校を取り巻く社会環境は今なお急速に変化している。札幌市小学校長会では今後も会員相互が教育課題を共有し、「共に拓く」姿勢で課題を解決しながら、新しい時代にふさわしい学校づくりをすることで、本市教育振興に寄与していきたい。